

区民と創る台東区の男女平等参画のための情報誌

はばたき21

通信

2018・3

No.35

特集

あなたの
居場所は
ありますか？

- 男女平等推進フォーラム講演会
「生きづらさ万歳！～私の居場所はここにある～」

講師：雨宮 処凜さん（作家）

インタビュアー：佐藤 香代さん（弁護士）

- 「生きづらい」と感じることはなんですか？
- どうする？ 家庭での性教育

- たいとうのキラッとさん紹介

- はばたき21情報コーナーおすすめ図書案内

- はばたき21公募区民との協働事業の紹介

「生きづらい」と

感じることはなんですか？

台東区在住の3名の方にフォーラム講演会と同じテーマで、編集委員がお話を聞いてきました。

転

勤で中国の上海から台東区に暮らし始めて4年になるコウさん(34歳)は二人の子供の育児で、日々さまざまな壁に直面しています。

「最初の頃は、学校で使うノートや鉛筆など、どこで買えるのか、どんなものが必要なのか、まったくわかりませんでした。体育着や水着なども、手紙でお知らせがくるけれど、何をどうしたらいいのかわからなかったです」

学校の先生がフォローはしてくれるそうですが、コウさんは日中は仕事をしているため、先生に相談することはなかなか難しいと言います。

「日本人のお母さんたちと仲良くなれるのかというのでもすごく不安でした。なるべく仕事を休んで、保護者会やPTAの会にも出るようにしましたが、輪に入ることができませんでした」

1年ほどそのような状態が続き、慣れない地での生活に、仕事と育児も重なり、コウさんは体調を崩してしまいました。そんなある日、学校の保護者会後に一人のお母さんが話しかけてくれたのだそう。

「中国のご出身なんですか？わからないことがあったらいつでも連絡ちょうだいと連絡先を交換してくれました」その方は、台東区で生まれ育ち、結婚してから同じ町に住んでいることもあり、近所のことも詳しく、学校のことや生活にまつわることも教えてくれます。

「運動会での場所取りのコツとか、制服が安いお店、習い事のことなどいろいろ教えてくれます。一時は、話せる人もいなくて、中国に帰りたいとずっと思っていました。でも、その人が『困ったときはお互い様』って言葉が日本にはあるんだよ』と助けてくれます。毎日、いろいろ大変ですが、この町での生活を楽しんでいます」と話しています。



わからないことだらけで話せる人もなくて帰りたいと思っていました。

下

町の雰囲気が好きで、この町に引越してきたと話すカナさん(27歳)とサチエさん(31歳)。二人はレスビアン女性同性愛者で、互いの人生を共に歩むパートナーとして一緒に暮らしています。

「私は友達にも親にも、自分が同性愛者だということは話していません。親には『早くいい人を見つけて結婚しなさい』と言われるんです。親に彼女の話を話して『私は大丈夫だよ、幸せだよ』って伝えて安心させてあげられたらいいなあと思うけれど、親は『同性愛』なんて受け止められませんか』とサチエさん。

一方、カナさんは友達や家族、同僚や上司にもサチエさんの存在を話していて、週末にはサチエさんと両親と食事をすることもあるのだそう。

「これからは二人で支え合って暮らしていきたい」と話すカナさんとサチエさん。二人が生きづらいと感じるのはどのようなことでしょうか。

「同性カップルだと、賃貸住宅が借りにくいんです。ゆくゆくは二人で家を買いたいと思うても、婚姻関係にないのが当然、二人でローンは組めません」とカナさん。

そしてサチエさんも続けて「病院の問題もあります。」



同性パートナーは法のもとでは赤の他人です。

もし彼女が急病で入院するようないことがあっても、家族で起こりえます。最近では生命保険の受取人を同性パートナーにすることもできるようになってきましたが、男女であれば結婚によって受けられるサポートが、同性カップルには何もないというのが現状です。私たちは生計を一にして生活を共にしているけれど、法律の下では赤の他人です。生きづらさがなくなるように公的な制度が整っていくことを願っています」

谷

中に住む乳幼児をもつ家庭に向けて地域の情報を発信する「谷中ベビママ安心ネット」(以下略・ベビママ)。主宰の石田桃子さんがベビママを立ち上げたのは2011年4月のこと。きっかけは3月に起きた東日本大震災でした。

「乳幼児をもつ家庭って、保育園でもなく、幼稚園でもなく、どこにも所属していない感じがあるんですよ。そんな『どこにも所属していない感』の中で、お母さんたちは初めての育児でヘトヘトになっていて。そこに大地震が起きて、周りのお母さんたちを見ていても、とても強いストレスがかかっているなど感じていました」

被災地へ思いを馳せながら、東京では、余震への恐怖や原



つらい時はつらいって素直に言える場が必要だと思います。

発問題、計画停電、紙おむつやミルクの買い占め騒動が起きていました。そんな不安定な状況の中で、お母さんはいざとなったら赤ちゃんを抱えて避難しないといけないという緊張の日々が続きました。「これは横のつながりをつくったほうがいいなと思いました。正しい情報を共有して、困っている人には近くの誰かが手を差し伸べる。せっかく同じ町に住んでいるのだから、困った時はお互い助け合えばいいんじゃないかな。そんなつながりをつくっていかれたらいいベビママをつくりました」

こうして始まった谷中ベビママ安心ネット。谷中エリアの保健、防災、医療、育児、お祭りなどの生活情報を発信するほか、生活必需品や育児用品などを譲り合う輪を広げたり、皆で顔をあわせて集まれるようなイベントを開催しています。

ベビママの活動を続けて7年目。石田さんのもとにはいろいろな人が集まってくるようになりました。

「町のことや家族のこと、心配な子のことやパートナーのことなど、個人的に相談を受けることがあります。地域の方から『あの人のところに



行けば何か知っているかもしれない』と、生活の中での困りごとや課題を抱えている人を紹介されることもありま。シングルマザーや発達障害の子をもつ方、精神疾患のある方や思春期の子などさまざまです」

石田さんは、そのような方の話を聞き、時に公的機関へつないだり、石田さんの知り合いの専門家に相談するなど、問題解決への「入口」のような存在になっています。

「いろいろな方とお話をする中で、自分のつらさを素直に言える場がないと、今の世の中、生きていくのは難しいんだな、生きづらいんだなあと感じています。つらい人は、つらいって、素直に口にだして言ってもいいと思うんです。ただ、それを言える人だったり、言える場が必要なんですよね」

その「言える場」になれたらと、石田さんは自宅を開放

「生きづらいと感じることはなんですか？」

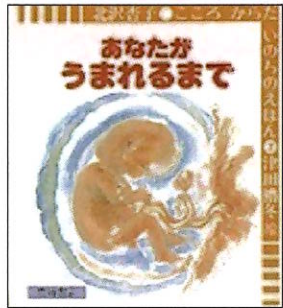
- 仕事
- 家族の病気
- 終活
- いじめ
- ジェンダー問題
- 夫婦別姓で結婚できない
- 男性中心社会
- 在日外国人への差別
- 迷惑行為
- マナーの欠如
- 社会格差
- 歪んだ利己主義
- 家庭内の男女不平等
- 貧困
- 障がい者であること

フォーラム講演会会場アンケートより

赤ちゃんはどこから来るの？

Books

情報誌編集委員が選んだ
おすすめの図書～台東区立図書館より～



『あなたが生まれるまで』
北沢杏子 作
津田櫓冬 絵
岩崎書店



『ふたりのはなし』
山本直英 さく
和歌山静子 え
童心社



『親と子で語る性のはなし』
R. H. ハリス 文
おきたげん 訳
M. エムバリー 絵
ほるぷ出版

- ・『正しい保健体育』みうらじゅん 著 イーストプレス
- ・『わたしのはなし』山本直英／和歌山静子 さく 童心社
- ・『おちんちんのえほん』
やまもとなおひで・ぶん さとうまきこ・え ポプラ社
- ・『メグさんの男の子のからだところQ&A』
メグ・ヒックリング 著 三輪妙子 訳 築地書館
- ・『男の子が大人になるとき』
岩室紳也 監修 中村光宏 絵 少年写真新聞社

からの方が、より詳しく理解をすることができると思います。お子さんが産まれた時、みんなが誕生を喜んだことや、小さくてとても愛おしかった、などということをお話してあげると、子供は『自分は大事にされているんだ』と感じることが出来ます。すると、自分や周りの人や友達を思いやり、大事にできる心が育まれていきます」

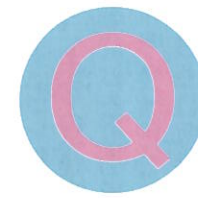
幼い頃からの積み重ねと子供との関わりが大切

ど、生活の中で、自然に学ぶことができる」と嶋村さんは言います。
「幼い頃からの積み重ねが大切で、そのつど、子供の『なぜ』に向き合い、子供が理解できる範囲で話をしてあげれば、子供はきちんと受け止めることができます。逆に閉鎖的になって、子供の興味の芽を、『まだ早いから』といって摘みとってしまうと、子供の中で、性的なこととは、聞いてはいけないこと、けがらわしいこと、などの負のイメージがついてしまい、間違った生理観である月経不浄視や自己卑下の気持ちにつながることもあります。また、人を好きになつたりすることも、家では話してはいけないことと理解し

てしまう可能性があります。性的な知識はその子供の疑問に合わせて話してあげて、むしろ、人を愛することは素晴らしいこと、人を愛することはどういふことを感じ、学んでいくことができる家庭の雰囲気大切です。」

嶋村さんにお話を聞くにあたり、私は「いつから子供に教えたらいのか？」「具体的にどのような子供の疑問に答えればいいのか？」をお聞きしようと考えていました。

しかし、嶋村さんのお話を聞いているうちに、その答えは「子供のタイミング」や「家庭の中」にあることがわかりました。



どうする？ 家庭での性教育

子供からの突然の質問に思わず考え込んでしまったり、説明に困ってしまうということはありませんか？ そんな時はどうすればいいのでしょうか。家庭での性教育について、助産師の嶋村さんにお話をうかがってきました。

どうして聞いてきたのかをその時に適した言葉で

子供から突然、「赤ちゃんはどこから来るの？」という質問をされると、どのように説明するのが正解なのか、親としては悩むところだと思います。
「子供は、日々たくさんの刺激の中でいろいろな『なぜ』と共存しています。そしてなんとなく知りたくて『どうして？』と、無邪気に聞いてくるものです。ですから、『性教育をしなさい！』と身構えず、肩の力を抜いて、お子さんがわかる言葉で、その子が今、理解できる範囲で、『なぜ』に向き合ってください。子供がとてとても大切ですよ」と嶋村さん。
子供と話をするにあたっては、どうしてそのことを知りたくなったのか、その「きっかけ」を子供から聞いてみるとよいのだそうです。幼稚園で友達から何かを聞いたとか、友達の家に赤ちゃんが産まれたのを知ったとか、きつと何かしらきっかけがあるはずですよ。子供が興味を持った背景を知ること、子供にどのような話をすればいいのヒントになるのだそうです。

オリジナルのストーリーで伝えると理解が深まる

では、どのように話をすればいいのでしょうか。ゆくゆくは学校で教えてくれるから、家庭内でわざわざ話をする必要はないと思うかもしれませんが、学校には学校の教え方があります。家庭では、学校とは違い、その子に合わせた話ができるので、それぞれの家庭の教え方で、お子さんと話をしてみ

るから、家庭内でわざわざ話をする必要はないと思うかもしれませんが、学校には学校の教え方があります。家庭では、学校とは違い、その子に合わせた話ができるので、それぞれの家庭の教え方で、お子さんと話をしてみたい。嶋村さんは言います。
「お子さんが、どうしてそのことを疑問に思ったのか、その『きっかけ』を思い出してみてください。もし友達の家に赤ちゃんが産まれたことがきっかけになつていたら、『あなたが産まれた時はね』と、お子さんが産まれた時のことに置き換えて話をしてみてください。自分自身のことを話してあげること、より理解が深まると思います」

たとえば、子供が生まれた時の写真を一緒に見ながら、「初めてあなたを見た時、とてもかわいいと思った」というお母さんの気持ちや「お父さんは、あなたを見て、うれしすぎて泣いていたんだよ」など、お父さんのその時の様子や周りの方々の反応などを話してみるのもよいのだそうです。

「さらにさかのぼって、お父さんとお母さんはどのようにして出会ったのか、そして『お父さんとお母さんが愛し合ってあなたが産まれてきたんだよ』と話してあげてください。『大好き』『愛し合って』などの言葉は、子供が理解できるわかりやすい言葉です」



嶋村克子さん

公益社団法人日本助産師会 地域貢献室 助産師。大学病院等で助産師として約4年勤務し、第一子出産後退職し専業主婦となる。平成3年第二子が小学校へ上がると、母子訪問指導員となり地域の助産師活動を始める。



見つけて、今の『あなたが生まれたオリジナルのストーリー』を話してあげるのがです」

小さいうちは、お父さんとお母さん、おじいちゃんとおばあちゃんなどといった家族のつながりや、命のつながりを中心に話をしてあげることが理解がしやすいと嶋村さんは言います。
『受精』については、小学校の授業の中でも学習しますし、それは成長して

たいとうのキラッとさん紹介

いずみ さわ
和泉澤

とも子さん

NPO法人 ガイドヘルプあいサポート理事長

和泉澤さんは視覚障がいを持つ知人と外出する機会を作るため、「社会の役に立つことをしたら」という娘さんの一言をきっかけに視覚障がい者の移動支援事業に関わりはじめました。移動支援から同行援護への制度変更に伴い、有志のヘルパーと平成24年にNPO法人を設立して、視覚障がいをもつ人の外出をサポートしています。そのほか、企業や学校でアイマスク体験会やガイドヘルプ研修を開いて、視覚障がいへの理解促進にも努められています。

利用者の中には、スキューバダイビングや山岳マラソン、写真撮影などを趣味にする方もいて、以前より外出する機会が増えたと利用者から喜びの声が届けられており、「未長くこの活動を続けていきたい」と抱負を語ってくれました。



はばたき21 情報コーナーおすすめ図書案内

『不自由な男たち』

ーその生きづらさは、どこから来るのかー
小島慶子・田中俊之著 祥伝社



「働いて家族と生きる」というごく当たり前の事が、しんどい世の中は間違っている。男と女で責任をなすり合うのではなく、一緒に声を上げて言うべきときというのが著者ふたりの結論。

『ルポ 希望の人びと』

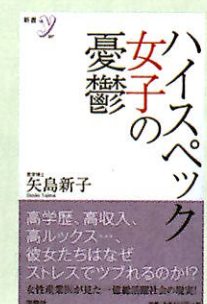
ーここまでできた認知症の当事者発信ー
生井久美子著 朝日新聞出版



これまで認知症は主に家族や医療・介護する側の視点で捉えられてきた。しかしいま、当事者の発信が社会を変えようとしている。認知症をめぐる問題のほとんどは「人災」であることもわかってきた。いのちの現場からの渾身の報告。

『ハイスペック女子の憂鬱』

矢島新子著 洋泉社



高学歴、高収入、高ルックス…彼女たちはなぜストレスでツブれるのか!? 女性産業医が見た一億総活躍社会の現実と、仕事のできる素敵な女性が生活と仕事の両立を楽しめる時代がくることを願って書かれた一冊。

はばたき21 公募区民との協働事業の紹介

男女平等推進フォーラム

ひとりひとりが個性と能力を十分に発揮できる男女共同参画社会の実現に向けて、年に1回実施している区民参加のイベントです。

講演会や男女平等推進登録団体によるワークショップ・作品展示などを実施しており、どなたでも参加できます。



はばたき21通信

男女平等を推進するための情報誌です。8月と3月の年2回発行しています。2002年7月に創刊号を発行し、本誌で35号目となります。

区役所や区民事務所、生涯学習センターなどの区内施設、都内女性センターなどで配布しています。



コミュニティ・カフェ

毎月第3土曜日の14時～16時に、プラザの調理コーナーで開催しています。参加費無料、予約不要、どなたでも参加できます。

カフェ運営委員による温かいもてなしと楽しい小物作りで、誰もがほっとできる場を提供します。



編集・発行：台東区立男女平等推進プラザ「はばたき21」

台東区西浅草3-25-16（台東区生涯学習センター4階）

電話 03-5246-5816 ※日曜・休館日以外の9時～17時

開館時間 9時～22時

休館日 第1・第3・第5月曜日（祝日にあたる場合はその翌平日）

年末年始（12月29日～1月3日）

情報誌編集委員（五十音順）

市村 有花里・漆原 美智子・河村 直希

近藤 章子・佐藤 陽子・鈴木 渚・富樫 聖子

ホームページ **はばたき21**

検索